

蝶の博物詩

生態28

交尾1



ヒメシロチョウ
(2004年7月1日 野尻湖)

photo by

Nishiyama



ヒメシジミ
(1997年6月19日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態28

交尾1

関東地方ではまだ珍しいクロコノマチョウが窓越しにみえたので、カメラ（銀塩フィルム）を取り出し急いで庭におりた。しかし目指す蝶の姿はすでになく、代わりに交尾中のキチョウの雌雄が草叢から飛んで逃げ、近くのランタナの葉にとまった。元来求愛中のキチョウは倦むことなく、まんじともえに飛び回っているが、交尾の間は動かないほうがよいにきまっている。驚かされて、心ならずも逃げるときは、雄か雌のどちらかが相手の体を引っ張り、離れることはまずない。

交尾中の飛翔形式は雄が雌を引っばる場合←♂+♀、逆に雌が主導権を握るときは←♀+♂と記載される。この形式は蝶の種類によって違うが、同種の蝶はほぼ同一の態度を示す。たとえばアゲハチョウ科、ジャノメチョウ科の蝶は←♀+♂、マダラチョウ科のカバマダラ、スジグロカバマダラおよびシロチョウ科のヒメシロチョウ（図）、モンシロチョウ、キチョウなどは←♂+♀であるが、エゾシロチョウは←♀+♂である（福田晴夫、高橋真弓『蝶の生態と観察』）。

交尾しながら飛ぶときの牽引役が雄、雌どちらにしても、2頭の体が離れない（あるいは離さない）のは驚きである。その理由は両性の生殖器のかなり複雑な構造による。雌の生殖器の開口は交尾口と産卵口の2つに分かれており、その間の部分に雄の肛門の近くのウクスという鍵状の突起を引っかける。さらに重要なのは陰茎の左右にある一對の把握器バルバ(valva)であり、陰茎を挿入した交尾口を両側からはさんでいる。バルバは雄の腹部の先端にあり、触れると骨化しているように硬い。なお雌の生殖器の開口の形式が2つではなく1つのものを単門類といい、いわば原始的な蛾の種類がこれに属している。

雄の生殖器のバルバを中心とした構造は種独特の特徴を示している。したがって翅の模様、色彩など形態学的な蝶の分類、命名が混乱していた時代に新しい分類法として用いられた。昆虫少年であった私も一時夢中になったが、参考文献がなく、戦争が激しくなってきたので挫折せざるを得なかった(1942年)。雄の生殖器の観察は、腹部の先端を切り離し、10%苛性カリ溶液に入れて煮沸、半透明となったところで水洗、解剖し、マーキュロクロムで染色、検鏡するという方法である。それから10年あまり経ち(1953年)、ほとんど同じような真菌検査をするようになるとは夢にも思わなかった。

野外で交尾中の蝶を発見すると、特別の感慨にひたる。雌雄同時に、しかも容易に採集できるのを喜ぶ蝶屋が多いが、とてもそんな気になれない。彼らの表情をファインダーを通して観察すると幸福を祈らずにはいられない。

交尾のあり様は蝶の種によって各々特徴があるようだ。小さなヒメシロチョウはクサフジの下に潜み、互いに向き合って翅を閉じ、触覚を柔らかに触れ合っている。ヒメシジミもマメ科、キク科の植物の葉の陰で、反対向きであるが、こっそりと愛し合っている。

西山茂夫